

安原 喜秀
武者小路規子 著

『大都會の小さな家』

——住の思想へ——

(筑摩書房 昭・63年)

皆川 美恵子

この頃、はたと気づいたのだが、小説にしろ、絵画や映画にしろ、私が感銘を受けて愛おしく思い続けている作品には、「住み家」が、ある重々しさをもって描かれているようなのである。アンドリュウ・ワイエスの絵で、窓辺に貝殻が並び、海水箱の置かれた「彼女の部屋」。往年の映画「心の旅路」の、スミスィとローラが新婚生活を始めた家。最近、話題となった映画「八月の鯨」で、海を眺めやる岬の老女の家。辻邦生の小説『廻廊にて』の、感性の魅力を湛えた少女アンドレの住む館。サン・テグジュベリの『人間の土地』の地球という棲み家。などなど。

私は特別、家に興味など抱いたことはないのだが、ここ一、二年、自分の住み家の居心地が悪くなり、生きる意欲も減退して、意気銷沈していく自分の姿を発見して、あらためて、私にとって、住み家がかげがえのないものであることを知った。そして、思えば、私に深い飲びを与えてくれた作品に

は、住み家が何らかの形で大切に描かれていたことをしみじみと感じたのであった。このことは、住み家から、やがて自分という身心が宿る容器が、どんな思いを湛えるにふさわしいかを、私にひそやかに知らせてくれる重大な手がかりになったように思う。

さて、家のことで苦しんでいた時、一冊の本を手にした。『大都会の小さな家』という本であった。

つつましやかな、目立たない本であった。私は副題の「住の思想へ」を目にしなかったら、手にとらず、やりすごしていただろう。なにしろその頃、住まいについて自分なりの考えを出さなくてはならないと思いつめていたから、副題が気になった。

この本はそれでも、「思想」などという堅苦しいことが詰まっただけではなかった。魅力的な住み方を希求する人々の溢れる「思い」、その「思い」を、多くの書物をあたることによってアプローチしていた。日本や外国、昔や今のさまざまな人々が、住ま

いへと寄せた思いが小説や随筆その他によって、たつぷりと紹介されており、それらの作品の引用によって「思い」は鮮やかに組み上っていく。読後、私は、その「思い」の柔らかな組み立てに満足した。

印象深い部分を紹介してみよう。近代合理主義建築を目指した鬼才ル・コルビュジェは、両親に捧げられるべく、安らぎの老後の家「小さな家」を設計し、建築する。ル・コルビュジェは、まず完璧な設計図を作り上げ、その家に適した敷地を見つけたための旅へ出た。そしてアルプスの山々を臨むレマン湖畔に捜し出し、自然環境を支配下に置いて、建築家の意図を完成させていく。しかし、自然はしたたかに、この「小さな家」に攻撃をしかけてきた。まずは樹木が成長し、家の基礎や日当りに影響を及ぼすところとなる。「プランは絶対的な主権をもつ」と信じているル・コルビュジェは、樹々を切り倒していく。気候風土に合った、その土地の自然に融けこむ住まいのたたずまいなど、眼中にないのである。

プランと自然の攻防の経緯は、「小さな家」をめぐる、ドラマティカルに綾なされていく。

この本には他にもたくさん家が登場する。たとえば、ピカソの過去を保存している「もう一つの家」。坂口安吾の無頼性を挑発した家。堀辰雄のルケを夢みる山荘。佐多稲子の出生の秘密を知っている生家。森鷗外が娘茉莉を育んだ夢の家。宇野千代の人生を綴る住居遍歴。そして、私にはこの本の圧巻とも思える、マルグリット・デュラスの女の住み家。著者は、デュラスの住み家にゆきつくべく、多くの家々をめぐるにきたようにさえ感ずる。

女の身体を、つまりは女の住み家を、世の中のあるもの宿らせる、共鳴の容器として輝かせ、その「反響室」を多声的な音楽の玄室とするデュラス。彼女自らが監督して映画化した作品群は、そういう女の館から響きわたる音楽に満ちているという。私はその音楽が聴きたくて『インディア・ソング』の映画ビデオを捜し出した。そして私がそこに

聴いたのは、身心を包む女体という、創つくの形こそが美しい容器が、やさしくうち震える折ひびに発する音色だったように思われてならない。

(十文字学園女子短期大学)

